

<実践研究報告>

教育者・保育者養成における研修旅行の意義と課題

山口学芸大学2年生による研修旅行を通して

平成22年度 研修旅行実行委員会*

The Meaning and Subjects of Lodging Study on the Training for Teachers and Nurses; An Analysis of Sophomore Students

Shirou AGAWA ; Kuniko KAWAKITA ; Tetsuya KAWANO ;
Kumiko SAKAMOTO ; Masayuki TAKEDA ; Akemi MOTOHIRO

1. はじめに

現在、教育現場では学級崩壊、小1プロブレム、いじめ、不登校、自殺の低年齢化など多くの問題をかかえ、その問題のすべてが現場の責任とされ、教員が批判の矢面に立たされている。現職教員は教員養成課程に学ぶ学生に対し、教師に今求められている資質・能力として、教育に対する熱意を持つこと、豊かな感性と思いやりを持つこと、統率力や指導技術をもつことと同時に、社会人としての基礎力をつけること、コミュニケーション能力を高めること、何でも貪欲に学び自分の幅を広げて欲しいという¹⁾。

山崎準二は、今の20代の教師の顕著な特徴の一つに、以前の世代に比べて「教職選択時期の早期化」、つまり小学校・中学校の教師との交流の良い思い出によって教職に就こうと考える率が高く、今の厳しい学校状況や教育状況を乗り越えていけるのかを危惧する。教員として子どもに向き合う事以外の仕事の多忙感や、予想をはるかに超える子どもの能力差、学力差への対応、発達障害などの問題をかかえる子どもの多様化や、保護者から求められる厳しい要望への対応など、入職以前に抱いていた教職イメージとの格差の拡大を懸念する。こうした教育現場に対応するには授業方法や子どもとの接し方などの教育技術だけでなく、むしろ幅広い人生体験や教養から培われる教員の「人間力」育成の大切さを主張している²⁾。

2006年7月の中央教育審議会の答申『今後の教員養成・免許制度の有り方について』の第1章「教員養成・免許制度の改革の基本的な考え方」の冒頭に「これからの社会と教員に求められる資質能力」として、教員により一層求められる普遍的、また激しい変動のある現代に求められる教員の資質能力を3項目掲げている³⁾。

① いつの時代にも求められる資質能力

教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、これらを基盤とした実践的指導力等

*阿川士郎、河北邦子、川野哲也、坂本久美子、武田雅行、本廣明美（五十音順）

② 今後特に求められる資質・能力

地球的視野に立って行動するための資質能力（地球、国家、人間等に関する適切な理解、豊かな人間性、国際社会で必要とされる基本的資質能力）、変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力（課題探求能力等に関わるもの、人間関係に関わるもの、社会の変化に適応するための知識及び技術）、教員の職務から必然的に求められる資質・能力（幼児・児童・生徒や教育の在り方に関する適切な理解、教職に対する愛着、誇り、一体感、教科指導、生徒指導等のための知識、技能及び態度）

③ 得意分野を持つ個性豊かな教員

画一的な教員像を求めることは避け、生涯にわたり資質能力の向上を図るという前提に立って、全教員に共通に求められる基礎的・基本的な資質・能力を確保するとともに、積極的に各人の得意分野づくりや個性の伸長を図ることが大切であること

山口学芸大学は、乳幼児から児童期の子どもの教育・保育に携わることを目指す学生の教育を目的とした、教員養成機関である。現代の教育現場の厳しい諸状況に対応できる教育者・保育者養成を目的とする本学もまた、大きな課題を抱えているといえよう。教育に関する知識、また教員として必要な技術の修得は、教員養成課程のカリキュラムを通して学ぶことができる。しかし、教育現場で教員に求められる様々な要求や「人間力」、中央教育審議会の答申に示される必要な資質能力のすべてを、教員主導の座学や演習で身につけることは困難といえよう。

本学では、開学（平成19年）以来2年生を対象に研修旅行を実施している。大学の4年制大学としての教養科目や教員養成のための専門科目による学びや実習だけでは得られない教育者・保育者に必要な学びが、この研修旅行で得られるものと考えている。つまり、最も与しやすい同学年によるグループワークによる人と出会い、コミュニケーションを通して互いに信頼関係を築きながら、協力による成果の可能性や大きさを感じ取ること、TPOの把握と適切な判断・行動ができること、また共に活動するには約束事の遵守が必要であるなど、教育者・保育者としての基礎力を実践的に養うことができるのではないかと期待している。そして、学生間の刺激は、教員が学生に対する指導とは質の異なる、教育者・保育者になるという目的意識の高揚に有益な効果があると考えられる。つまり、目標にむかって研鑽する意欲、また高い職業意識・独創性やチャレンジ精神の醸成など、学生同士が相乗的にプラスの方向にはたらきかけていくことができるのではないかと期待である。全員が主体的に参加することによって、グループの、さらにはこの学年全体の、教育者・保育者を志向した学びへの意欲の充実と達成を目指したい。

本論文は、平成19年度に開始し、検討を重ねつつ3回目の実施となった22年度の研修旅行の企画運営と実施経過を踏まえ、同行した教員全員が、学生の教育者・保育者としての資質の形成との関連について議論を重ね、指導体制など課題を考察したものを分担執筆したものである。

2. 研究の目的

本研究は、教員養成課程の2年次生を対象として行った研修旅行が、教員としての資質向上に

どのように関与していけるかを、実践を通して検証することを目的とする。本学は大学設置以来4年を経た。学生が教育者・保育者を目指して円滑、かつ充実した学びを達成できるよう、各免許・資格に必要なカリキュラムと実習などとの関連について検討を重ねている。現在のところ研修旅行は単位化せず、一つの行事として設定している。

研修旅行の目的、対象学年の教育課程における状況と特徴を記す。

1) 研修旅行の目的

研修旅行は、①全学生の参加、②学生の主体的な企画・運営、③グループワークの重視という3つの方針のもと、教育者・保育者に求められる能力と資質の育ちに大きく関わる必要不可欠な内容を多く含んでいると考え、学開設当初より2年次の後期開始直前に2泊3日で実施している。

研修旅行では、学生は企画・運営・表現など何らかの役割を担う。具体的には、学生の意見調整をしながら計画を立て、学内外の関係者と交渉をし、必要な物品を買いそろえる等の事前準備がある。また研修旅行時は、計画したことが予定通り運ぶよう手配や気配り、企画の目的が達成できるよう順序立てて環境構成するなどの運営に当たる。同級生数十人の前に立って指示し、全体の進展を見守りながら必要な援助、助言などの役割を遂行する。問題が生じた場合には、解決の方法を模索し、適切な対応をする。

表現系活動では研修旅行以前からグループ活動を開始し意見交流を通して表現をさらに豊かにする。また活動終了時点では、活動についての総括、そして後片付けに当たる。これらを通して、学生は、様々な対応力を身につける。また多角的な視点から事象を把握する力や、コミュニケーション能力を始めとする知識・技能の獲得、及び人的ネットワークの形成ができる。生じた困難は、自分自身の問題として把握し、同期生の支えなどによる解決を通して問題解決能力の理解に転化できるなど、経験知として身につける。これらの経験は、身近な他者の理解に結びつき、受け止め、その上で自分の行動を考えていくことができる。リードする立場とされる立場の両方を経験することにより、自己の置かれた立場とは反対の立場の受け止めと理解が可能となる。

研修目的として、学生には次の3項目を提示している。

- ①研修内容を企画・運営し、集団行動を経験することにより、協調性、コミュニケーション能力の向上を図り、教育者・保育者としての高い資質を形成する。
- ②自然、文化、社会に触れ、親しむことで教育者・保育者としての見識を広める。
- ③学生相互の交流、親睦を深めるとともに、互いを大切にし、尊重する心を育む。

以上、研修旅行によって、教育者・保育者としての高い資質の形成、見識の獲得、人間を尊重する精神を育むことを目的とする。

2) 対象学年の状況と課題

<対象学年の状況>

研修旅行参加の学生は、教育学部子ども教育学科の教員養成課程の2年次に在籍している。幼稚園教諭免許状の取得に関する必修科目を中心に、小学校教諭と保育士の資格に関する科目を両方、あるいは選択しながら、入学当初より教育者や保育者を目指して大学生としての生活を始め

ている。本稿で対象となる平成 22 年度の 2 年生の特徴は、研修旅行実施時点で 71 名在籍し、他学年（4 年 65 名、3 年 49 名、1 年 57 名）と比較すると最も多い。免許・資格取得希望状況は、小学校教諭免許状・幼稚園教諭免許状・保育士資格の三つを希望する者 50 名（70%）、小学校・幼稚園教諭の二つを希望する者 5 名（7%）、幼稚園・保育士の二つを希望する者 10 名（14%）、小学校のみを希望する者 4 名（5%）であり、免許・資格取得希望の割合は他学年と同程度である。

研修旅行を実施する 2 年次前期終了時点の学生の学びの状況は、教養科目の履修と、保育者養成に必要な専門科目履修の終盤時期であり、小学校教員養成に関わる専門科目の履修が開始する段階にある。また幼稚園、保育所、児童福祉施設、小学校における 2～3 日の短期の見学実習を終えている。0～12 歳の大きく変化する子どもの育ちや、子どもの教育・保育に当たる教育者、保育者の役割の概要について、座学で学ぶだけでなく、観察・参加により耳目を通して、また触れ合いを通して把握している。また保育所での見学・参加を主目的とした 10 日間実習を終え、日々変化する子どもの成長や具体的な保育者の援助の在り方についても実践的に学んでいる。これらを通して、自身が何のために大学で就学をしているのか、子どもの成長や教育者・保育者を観察することで、教育者・保育者に求められる能力と資質に気づき、自身の課題や問題意識も芽生え始めている。

数十名の同期生とは、授業やクラブ活動で接する者については、顔と名前は、ほぼ把握している状況にあると思われる。

<対象学年の課題>

本稿の対象である学年は在籍学生数が多い。人数が多いことにより、様々なことがらに対する価値観や大学生活への期待も多様であることが推測できる。この学年は、若干名ではあるが、入学直後より授業の欠席、遅刻者が多く、グループごとに行動する傾向や、物事に真剣に取り組むことができない学生が見られることなど、教育者・保育者を目指す学生集団としては課題が多いと教員側は捉えている。

これらの学生集団が抱える課題について、多様な価値観をもつ学生たちが研修旅行を通して、互いに存在を知り、存在を受け止めながら目的意識を明確かつ共有し、協力し合うことによって、教育者・保育者としての知見を広め、深めることができる可能性を期待したい。また、学生一人ひとりが自己の潜在的な能力に気づき、また他者を認めながら共通の目的をもち達成感を味わう可能性も期待したい。その上で、教員を目指すという目的意識を再認識し、学習意欲の向上にむけて互いに刺激し合えるのではなかろうか。

（以上 河北邦子）

3. 研修旅行の概要

この研修旅行を実施するにあたり、どのように計画し、準備を行ったか、その経過を以下に述べる。

5 月 28 日（金曜日）に教員が集合して、企画会議を開催。そこで前年までの旅行を踏襲しつつ、

八つの研修内容が提案された。前年度までの研修旅行にさらに①、③、⑦、⑧を追加した。

- ① 移動時バス内でのレクリエーション
- ② 名所旧跡の観光
- ③ フリースピーチ大会
- ④ 全体レクリエーション
- ⑤ 飯盒炊爨
- ⑥ 自然体験
- ⑦ グループ・プレゼンテーション
- ⑧ 写真コンテスト

会議では活発な議論が交わされた。⑦グループ・プレゼンテーションは今の2年生には難しすぎるのではないかという声もあった。⑧写真コンテストについては、本学が芸術教育に力を入れた大学であることを考えれば、魅力的な試みになると期待された。④や⑦などは、学生たちの創造性や自主性を活かすよう助言した。教員があまり口を出さずに学生同士で意見を出し合うことや、自由に旅行を楽しむこともまた重要である。2泊3日の費用を3万円以下となるよう配慮したが、学生にとっては高額であり、アルバイトなどでかなり苦勞しなければ得ることの出来ない金額である。さまざま、学生たちの楽しみややる気を削がないよう配慮しつつ、八つの研修内容を含めることとなった。

対象学年は71名という他学年に比べかなり多い学生数であり、引率の教員を含めると80人近くになる。この人数が一度に宿泊し、研修のできる施設は限られてくる。また県外に帰省する多くの学生のことを考えると夏季休業の最後、後期の始まる直前という時期に限られる。様々な条件をクリアし、早めに予約することを考えると、行き先について学生に十分に検討させることは難しいと考えた。行き先などの決定は早めに教員サイドで済ませ、プレゼンテーションなどの準備のための時間を確保したいと考えた。多数決のようなことをしたとしても、地理的あるいは金銭的な限界があるため、全員を満足させるコースを選定することは容易ではない。むしろどこに行ったとしても、有意義な時間を過ごすような姿勢や能力こそが重要であり、そのための協力体制を作り上げることが重要である。行き先については、九州西部方面、瀬戸内海の直島など、いろいろ候補が挙がったが、旅行社のアドバイス等を参考に教員で検討を重ね、出雲、松江、蒜山、倉敷のルートで2泊3日で、宿泊地は、蒜山の国民休暇村で決定した。また、公共交通機関は利用せず観光バスで全員が常に一緒に動けることとした。

<3日間の行程>

9月21日	山口学芸大学 → 出雲大社 → 松江市観光 → 蒜山高原 → 夕食等 → フリースピーチ
9月22日	全体レクリエーション → 飯盒炊爨 → 自然体験 → 夕食等 → グループ・プレゼンテーション
9月23日	蒜山高原 → 倉敷美観地区 → 山口学芸大学

<準備段階の経過>

6月4日（金曜日）

クラス委員と行事企画委員の学生（5～6人）に対し、教員側から研修旅行についての提案をした。楽しいだけの観光旅行ではないことは、学生たちも勿論承知しているものの、研修を強調しすぎると、やる気を失ってしまうかもしれない。そのような葛藤を抱えながら説明をしたが、幸い最初は不安そうだった学生たちも、幾分積極的に参加しようという気持ちに変わり始めていたように感じられた。

7月12日（月曜日）

初めて全員を集め、研修旅行の打ち合わせを行った。この研修旅行の主旨、目的について話をする。あくまでも学生の主体性を重視した研修とするためには、様々な企画・立案を含め、仲間を引っ張っていくことのできる世話役としての担当学生を選定することが始まりとなる。それは、決して目立ったり楽しかったりする仕事ではない。担当学生は、もともとあったクラス委員、行事企画委員を強制的に配置するのではなく、自発的に挙手してくれたやる気のある学生に任せることにした。立候補する者が出てくれるかどうか心配されたが、結果的には積極的に手を挙げてくれ、この学年の意外な一面を見たような気がする。学生主体の役割分担が明確になり、彼らを中心に、それを手伝おうという学生の輪が広がっていくことを期待した。

前述の八つの研修内容のうち、心配されたのはフリースピーチ大会とグループ・プレゼンテーションだった。フリースピーチ大会は、併設する山口芸術短期大学の研修旅行で長く実践してきた経緯があるが、山口学芸大学では初めてであった。教育者・保育者になるためには3分間で分かりやすく思いを伝える能力は必要不可欠である。「真剣に耳を傾けて聞く」ことを全員の約束とした。誰が聞か分からないような状態で各自が準備することが有効であると考えフリースピーチの班については教員サイドで検討し、直前まで公表しないことにした。

グループ・プレゼンテーションは、10人程度のグループを7班作り、自分たちで企画し、練習した出し物を皆の前で発表しようというものである。歌、合奏、ダンス、寸劇など様々なものが予想されるが、目立つことの好きな特定の学生のみが前面に出るものではなく、皆に出番があり、グループ全体として表現することが大切である。やりたいことは、十人十色であり、その中でグループのコンセンサスを如何に図り、決定していくかのプロセスも、学生にとって良い経験であり、この過程自体が既に研修の一つといってよいであろう。できるだけ普段からあまり接触のない学生同士が力を合わせて発表できるように、男女のバランスをとりながら、教員サイドで班のメンバーを決定した。ふだん一緒にいる友達が、できるだけ同じ班にならないよう配慮しなかったが、学生同士の間関係の全てを把握しているわけではないため、思惑通りにはいかなかったかもしれない。従って、同じ班の中に、仲の良い学生がいたり、逆にこれまで全く接点がなかった学生がいたりすることも十分に考えられた。その意味で、有利、不利といった組み合わせが出てくるかもしれないが、そのような偶然性も含めてそれをプラスに活かせる力が必要である。このことで、特に不満を言う学生はいなかった。夏休み前にメンバーが発表され、その後、学生たちもメンバー毎に集まって準備を進めていくことになる。

教員サイドからは、最低限度のルールを学生に示す。「規律を守って集団行動をする」「遅刻、ゴミ、飲酒、喫煙、深夜の迷惑行為の厳禁」「特定の仲間だけと話をしない」「素直に喜び、感動する」「何かを学ぼうと努力し、終了後レポートにまとめる」などを提示した。それぞれの学生の希望や想いはいろいろであろうが、与えられた条件の中で最善を尽くし、予想される以上の高い成果を上げることこそ、あらゆる職業人としての重要な資質であるといえるであろう。

7月後半

夏季休業に入ってから、担当学生と教員、さらには旅行会社の間で細かな連絡調整を行った。研修内容の細かいプログラムについては学生の希望にできるだけ添うようにし、教員としてはそれが実現できるよう助言を行った。自然体験については、ウォークラリーとアイスクリームづくりをすることに決定した。やることが決まれば、それをを行うために必要な施設や会場を確保しなければならない。経費面や悪天候への対応など、担当学生に対して声をかけてきたが、助言というより、担当の学生を不安にさせることが多かったかもしれない。しかし学生は、教員に頼らず学生自身の力で現地に問い合わせを調べたり、旅行業者と打合せをしたりすることができた。担当学生には大変な思いをさせてしまったかもしれないが、結果的には誰よりも多くのことを多く学んだのではないかと思う。学生のプランが出来上がってきたところで、当初から計画していた予算に収まるよう、旅行業者と折衝を重ね、行程表が完成した。

この旅行を実施するに当たっては、高額な金銭の絡むことでもあり、保護者に対し申込書と、旅行の主旨と計画、並びにこの旅行に係る経費納入のお願いの文書を添えて発送した。単なる親睦の旅行ではなく、教員養成を目的とする本学科に相応しい研修を重視した旅行であることを説明し、費用負担についての理解を求めた。この研修旅行は、卒業必修科目でも正規の授業でもないが、最終的には全員参加となった。班ごとでの声をかけあって準備していたことがやる気を引き出したのかもしれない。全員が期日までに経費の納入を完了した。

旅行のしおりの作成については、県外出身の学生が担当した。しおりは学生がそれぞれの企画担当者として調整を図りながら作成準備を進めていった。夏休みに入ってからメールやFAXでのやり取りで制作することとなった。そして24ページにもわたる旅行のしおりの原稿が出発の数日前に送られ、学生たちが綴じ、立派なしおりが出来上がった。

9月20日（月曜日）

祝日（敬老の日）であったが、旅行の前日ということで当初の予定通り、直前のオリエンテーションを行った。71名中9名の欠席があり、明日の出発を前に少し不安を残した。出来上がったばかりの旅行のしおりを配布し、旅行の目的や注意事項を確認し合った。その後、学生たちは、グループ・プレゼンテーションの最終チェックを時間の許す限り、それぞれのグループで行っていたようである。引率する教員間でも最終の打ち合わせを行った。いくつかのイベントにおいても賞状と景品を与えることにしその準備を行った。優劣を付けることに反対する声があるかもしれないが、素晴らしいものに素晴らしいと語ることは大切なことである。厳密な順位を付けることは避け、上位2チーム程度で決定することにした。

＜研修旅行当日の経過＞

9月21日（研修1日目）

出発式を行った。最初の集合時においては、学生二人が遅刻してきた。それ以後は皆に迷惑を及ぼすような大きな遅刻はなかった。バスの移動が予定よりもずいぶん遅れて、出雲および松江の観光時間が短くなってしまったが、蒜山の宿舎には予定通りに到着する。夕食の後は最初の研修プログラムとなるフリースピーチが行われた。観光、フリースピーチについては次節で記述する。

9月22日（研修2日目）

朝から雨天のため、全体レクリエーションは室内で実施した。午後からは飯盒炊爨、アイスクリーム作りを行う。最後は皆が楽しみにしていた高原ウォークラリーであったが、雨天のためやむなく中止し、近くの体育館でバレーボール大会を開催した。雨天に備えて、別の企画をしっかりと準備していたことで、あわてることなく時間を有効に使うことができた。学生たちは楽しそうに取り組み、夕食後は、グループ・プレゼンテーションを行った。

9月23日（研修3日目）

朝、準備を整え研修施設を出る。倉敷を観光して、予定通りの時間に大学に帰着した。バスを降りたところで、この研修旅行の解散式を行った。担当学生が無事の帰着と担当者としての不手際の詫びなどについてあいさつをした。そして、他の学生たちはこの研修を支えてくれた担当学生に対し、感謝の気持ちを表現することができた。病気や事故もなく三日間を無事に終えることができた。

研修旅行終了以降

この研修旅行に参加してのレポートと写真コンテストの作品写真を提出。写真作品については、一定期間、学内に掲示され、学生たちは他の学年も含め、興味深く眺めていたようである。写真コンテストの掲示以前のレポート提出期限であったため、このことについての感想をレポートに記載している学生は少なかった。

（以上、武田雅行・川野哲也）

4. 研修旅行の実際および考察

引率した教員同士で議論を重ね、本学の研修のあり方について考察を行った。学生たちのレポートの中からのいくつかを取り上げながら、各教員からの分析を述べる。

1) 研修旅行における観光について

＜研修旅行における観光の位置づけ＞

この研修旅行の目的（前述の②）「自然、文化、社会に触れ、親しむことで教育者・保育者としての見識を深める」とあるように、旅行という側面も大変重要な要素と考えている。わざわざ長時間バスに乗って見知らぬ場所に行き、その土地の風土や歴史に触れ、その土地の名産を食し、現地の人と触れ合う。そのような経験と積み重ねが、人間として、教育者・保育者としての引き出しを一層大きくしてくれることは間違いない。研修だけを目的とするのであれば、近場の充実した研修専用の施設を選んで行えば、もっと時間や経費を含め、有効に研修の目的が達成できるであろう。従って、本学のように研修と旅の要素を兼ね備えたものとして計画を立てる時、目的地の研修施設としての機能も勿論であるが、そこの自然環境や観光ポイントを含めた検討を十分に重ねる必要がある。

<観光の実際>

1日目、長時間バスに揺られて到着したのは出雲大社であった。伊勢神宮と同じように、50年に一度の式年遷宮のため、有名な本殿はプレハブの壁で覆われ、見る事ができなかった。この記念すべき年ここにこをお参りできたことをポジティブに捉え、思い出とすることができればよいのであるが、学生にとっては、巨大な大しめ縄だけが記憶に残ったかもしれない。その後、松江に到着。時間的な都合で、数か所の観光スポットを駆け足で回ることとなった。

最終日にも、岡山県の倉敷を観光する時間を設けた。西日本を代表する、観光スポットであり、昼食を含めての4時間は、観光するには十分な時間であった。それぞれが数人のグループとなり、歴史ある美観地区を有意義に散策していたように思う。この研修によって意気投合したグループでの行動もあったようである。ある学生は、「知らない土地を友達と一緒にまわるというのは新鮮で楽しい時間を過ごすことができた。何も予定を立てずに行き当たりばったりでまわったが、それもすごく楽しかった」と書いている。

行き帰りのバスの中ではゲームや観光案内などを行った。長時間の移動の中で少しでも盛り上げようとする学生たちの意気込みを感じることができた。学生のレポートを見ると、往きのバスの中で出雲についての説明を聞き、神在月のことや、二礼・四拍手・一礼のことなどを興味深くとらえている学生が多かったことが分かる。ある学生は出雲について「何か神秘的なものを感じた」「新鮮で感動した」と述べている。またある学生は旅行全体について「松江では和を感じ、倉敷美観地区では洋を感じました」と述べている。また、大原美術館に入った数少ない学生の一人は「大原美術館でエル・グレコの『受胎告知』を見たときは、感動の一言だった。絵画や美術品は実際に目の前で眺めることで、本物の良さが窺えた。今後も美術館などに足を運ぼうと思った」と述べている。

<課題>

大人数での旅行においては、計画通りに事を運ぶことはなかなか難しい。移動に関しては、時として体調の不具合を訴える学生も出てくるし、定期的なトイレ休憩も考えねばならない。また、渋滞に巻き込まれることもあり、結果的に予定していた滞在時間が短くなってしまいうる。レポートでも松江での自由行動の時間の短縮に対する不満が多かった。仕方のないこと

とはいえ、もう少しゆとりを持った計画となるよう配慮する必要があった。これは次回からの課題としたい。倉敷では、日本でも有数の素晴らしい美術作品を所蔵する大原美術館があるのだが、入館した学生は、ほんの僅かしかいなかったようである。子どもの頃から、教科書で目にしてきたような有名な作家の作品を目にする絶好の機会であったにもかかわらず、残念で仕方ない。本物を知るということは、本学の理念でもある「至誠の心」にも通じるものであり、芸術を基盤とした教育を標榜している本学としては、これだけは、強制的にでもコースに取り入れても良かったかもしれない。出かけて行く場所の歴史や風習、観光ポイントなどを予め調べ情報収集する事前の準備が、旅の楽しさや感動を何倍にもしてくれる。旅行の前にそのあたりの大切さについてもっと説明しておく必要があったかもしれない。

(以上、武田雅行)

2) フリースピーチ大会

フリースピーチ大会は、1日目の夕食後に会議室で行われた。観光を除くと、全員集合しての研修旅行最初のイベントである。

<フリースピーチ大会の目的>

フリースピーチ大会は、研修旅行の目的の①の「協調性、コミュニケーション能力の向上を図り、教育者・保育者としての高い資質を形成する」に合致した活動である。

決まった時間内（今回は3分間）に、聞き手に分かりやすく内容（意思や情報）を伝えるということは、教育者・保育者を目指す者として、大変重要な能力である。また、仲良しの友達とは自由に話が出るが、そうでない人とは緊張してしまっていることも言えないというのではいけない。そこで、班のメンバーはランダムに決め、直前まで発表しないという方法をとった。

メンバーが発表され班毎に席に着いた時には、学生たちにかんりの緊張の色が見られた。

<懸念されたこと>

私はこのフリースピーチ大会の講評を担当することになっていたが、次の二点において不安を感じていた。一つは、親しくない人の前で本音が話せるか、ということである。スピーチがうまくいっても、当たり障りのない（内容の軽い）話では、お互いに学ぶもの（残るもの）が少ない。もう一つは、親しくない人の話を「真剣に耳を傾けて聞くこと」ができるか、ということである。極端に言えば、スピーチがうまくいくかどうかは聞き手次第である。よい聞き手がよい話し手を生むのである。普段の講義の聴講態度から考えると心許ない限りである。

<フリースピーチ大会の実際>

いよいよフリースピーチが始まったが、私の当初の心配はすぐにどこかへ吹っ飛んでしまった。皆が話し手の顔を見て、「真剣に耳を傾けて聞」き、時にはうなずいたり感嘆の声を出了たりして聞いているのである。その温かい聞き手に支えられて、話し手の話も熱を帯びたものになっていった。話の内容についても「皆は真剣な話をしている私はドラえもんの話をしたので、もっと

きちんと考えてくるべきだったなと反省した。」というある学生のレポートに見られるように、それぞれにしっかり考えたものであった。

以下、学生のレポートを引用しながら、このフリースピーチ大会で、学生が何を感じ、何を学んだか探してみたい。

- 初めは、フリースピーチ大会そのものについても否定的な考えもあったようである。
 - ・初めは、フリースピーチをすることにも疑問があり、学生の中でも「やらんでもいいやん」という声もあった。
 - ・最初はフリースピーチが嫌で、何を話そうかずっと考えていた。
- ランダムな班編成については、多くの人が戸惑いや不安を感じていた。
 - ・グループは日頃ほとんど話さないメンバーだったので、上手くいく気がしていなかった。
 - ・メンバーにはいつも話す友達がいるとは限らず、中には普段あまり話さない人もいる。なので、最初はメンバーが自分の話をきちんと聞いてくれるかが不安だった。
- メンバーの聞く態度によって、不安が解消していった。
 - ・グループの中で皆が自分の話を真剣に聞いてくれたので、私も話しやすかった。
 - ・皆が話に耳を傾けてくれていて、話す側としても話しやすかった。
 - ・私の方を見て、話を真剣に聞いてくれるだけでなく、一緒に考えてくれてるのが分かった。
- フリースピーチ大会で学んだこと。
 - ・話の内容がつまらないものだったのに、私の目を見て話を聞いてくれて、話に対して反応してくれて、みんなの姿を見ていると、自分が人の話を聞いている時もこういう姿でいると、話をする人が気持ちよく話をすることができるな、というのをまわりの友達の姿から学ぶことができた。
 - ・みんなの過去の話や体験談、悩みや楽しみ、いろいろなことを、あの短時間の中でたくさん知ることができ、今までよりぎゅっと相手との距離が縮まった気がして、フリースピーチを終えたあとは、なんだか周りにいる友達全員が懐かしい感じがした。
 - ・グループの代表者の発表は感動した。また、皆がその話を真面目に聞いている姿を見て、いつもと違う雰囲気を感じた。
 - ・日頃関わらないので第一印象で決めつけていたその人たちのイメージが、話し合うことでまた一変した。
 - ・全体で話した人の内容には熱い気持ちになった。(中略) 友達の話聞いて、自分自身と向き合えたように思う。
 - ・自分の過去の話をしてなぜかスッキリした。本音？が言えたことでクラスに溶け込めたのだと思う。「子どもも本音と言える環境がなければ歪むのかな？」と考えながらその後はいろんな人と話すことが出来た。

<まとめ>

学生の4割近い人たちが、研修旅行で印象に残ったこととしてフリースピーチ大会を挙げてい

ることからも、フリースピーチ大会が学生にとって有意義な活動であったということが分かる。これからの学生生活を通していつそう和が深まっていくことが期待できる。今後もこの活動は是非続けていきたい。

次に講評の概要を載せて、この項を終わる。

<講評の概要>

同学年としての仲間意識が育っていることを感じた。話す人を見て真剣に耳を傾けている姿に感動した。話す人も初めは緊張もあっただろうが、落ち着いて、安心して話せたと思う。

今日のフリースピーチ大会を通じて、普段はあまり話し合わない人とも、お互いを理解するきっかけが出来たと思う。これからも積極的に人と関わってほしい。

(以上、阿川士郎)

3) 全体レクリエーション

研修旅行2日目の午前中に、参加者全員でのレクリエーションが行われた。クラス委員・行事企画委員を中心に有志のスタッフが、保育や教育の場で活用できる昔の遊びや、ゲーム・クイズなど、全員が楽しめる企画を準備した。保育や教育の場で活用するためには子どもの知的好奇心を高めるもの、感性を刺激する表現の面白さが感じられるものなど、単なる娯楽性の高いレクリエーションとは違う要素が求められるだろう。また、全員が楽しめるための活動形態や内容への配慮も必要である。

これらの視点を持ちながら、今回の全体レクリエーションが研修旅行の目的をどのように達成しているのかを検証していきたい。遊びやゲームの種類や活動内容や活動中の学生の様子を振り返り、旅行後の学生のレポートと合わせて考察していく。

<活動内容>

会議室に集まった全員の前で、まず2名の担当学生が1人ずつジェスチャーゲーム「チューリップ」「1.2.3」を行った。これはどちらも、説明内容と2～3種類のジェスチャーを対応させ、クイズ形式でそれらを皆に尋ねるゲームである。人の話を聞く際に、言葉以外の情報をキャッチしようとしているか、どれだけ広い視野で見聞きしているかが問われる問題であった。ゲームの終わりに担当者から、教育者・保育者として子どもの発信する様々なサインを見逃さない注意力を鍛えることにつながるのではないかとコメントがあり、研修目的をしっかり抑えたゲームの選定であると感じた。

次に、言葉以外のコミュニケーションを使って各自の誕生日を伝え合い、全員が輪になる「誕生日の輪」が行われた。一人ひとりが相手にどうにか思いを伝えたいと、普段よりもしっかり相手の目を見て、身振りもはっきりと大きく行っていた。言葉という一つの表現手段が失われたとき、残された表現手段である表情や身体表現を豊かにすることで意思を伝えようとしていた。表現の指導者として学生の潜在能力を見るよい機会であり、映像などで記録したものを学生に見せることができれば、客観的に自分の表現を認識することができ、より効果的だったのではないか

と思う。

わらべうたでよく知られている「あんたがたどこさ」は、まりをつく代わりに、手をつないだ輪のまま歌いながら右方向に1拍ずつジャンプする運動遊びが提案された。拍に合わせたジャンプと、フレーズの終わりにたびたび出てくる『さ』で、素早く逆の左方向にジャンプすることが求められ、かなりの運動量を伴う身体遊びであった。学生の呼びかけで一部教員も参加し大いに盛り上がった。教員は見学が原則であったので、担当学生の即座の判断で教員に参加を呼びかけたものと思われる。呼び込むタイミングや教員側が参加できそうな雰囲気か、参加することで楽しい雰囲気が損なわれないかなど判断し、臨機応変な対応で活動がより活性化されたのではないかと思う。

その後10人程度のグループごとに輪になり、メンバー全員の人差し指だけでフラフープを下から支え、そのまま上げ下げする「ヘリウムフラフープ」や、隣の人以外の右手や左手をつなぎ、その手を放さないで一つの輪にほどいていく「人間知恵の輪」などを楽しんだ。フラフープの上げ下げという単純な活動が、人数が多いと思うように定まらず、下げようとしてもまるでヘリウムガスの入った風船のように浮き上がっていた。人と協調するためには自己を主張しすぎても譲りすぎてもうまくいかないことや、どのようにすればお互いに息を合わせることができるかを、人差し指を通して実感したのではないだろうか。

「人間知恵の輪」では、グループの一体感が見ている者にもよく伝わってきた。つないだ手と手の間をくぐったりまたいだり、自分たちの体を使い人と触れ合いながら、不自由な姿勢から抜け出すために知恵を出し合っていた。自分の体なのに思うように扱えず苦しんだり、予想しない態勢をお互いにおもしろがったり、コミュニケーションを図る上で、体を動かすことが気持ちや感情を柔軟にさせることにつながっていることがうかがえた。

<学生のレポートより>

旅行出発の朝、担当者はバスに乗り込む直前まで道具等の調達に走りまわっていた。事前準備の不備は、活動内容に大きく関わり、活動者の士気を損なうことにもつながりかねない。研修旅行は何をするかだけが目的ではなく、それぞれの活動を行うためにはどのような準備物が必要なのか、それらをどのように手配するのか、また、活動の展開の仕方など、手順・段取りを学ぶよい機会であるともいえる。決して順調に進められていたわけではない担当者を支えようと、有志が集まり、1日目の夜、フリースピーチが終わってから、手本の示し方、説明の仕方や手順など、活動を楽しくスムーズに進行させるために遅くまで打ち合わせをしていた。有志の一人は「説明をするときにただ説明するのではなく、小学生でもわかるような説明を心がけたり、これからするレクリエーションを楽しそうと思ったり、やりたいと思ってもらえるようにしたいと思った」「全体レクリエーションのときだけ前に出て活動したが、そのおかげでたくさんを感じ、前に出て活動したからこそ学べたものがあるのではないかと思った」と述べている。率先して協力しよう、友達が困っていれば力になろうというこれらの学生の協力が、このプログラムの成功に大きく貢献していたといえるだろう。

レクリエーション担当の責任者は、準備段階で自分がうまくリードできないとき、逆に周りの

人がどんなに動いてくれているかがよく見えた」とレポートに記している。「研修旅行を支えているのはこんな仲間なのだと気付いた時、自分も彼らの助けになるよう心がけたことで、自分を立て直すことができた」とも述べている。「レクリエーションを担当して事前準備の大切さとスタッフとの打ち合わせの重要性を実感したが、私はそれ以上にみんなに支えられている、助けられていることを実感できてとてもうれしい」との記述からも、彼が今回レクリエーションの担当者として悩みながら活動した中で得たものは、非日常的な研修旅行であったからこそではないかと思う。まさに、研修目的の①研修内容を企画・運営し集団行動を経験することにより、協調性・コミュニケーション能力の向上を図り、教育者・保育者としての高い資質を形成する、や③学生相互の交流・親睦を深めるとともに、互いを大切にし、尊重する心を育む、が達成されていたのではないだろうか。

また、今回のレクリエーションを体験した学生のレポートには、「みんなで息を合わせたり意見を出し合ったり、教え合ったりしたら上手く行く事も実感できて、協力し合うことで大きな力が生まれることを学んだ」「話し方など、前に立って率先して遊びを説明していく学生から学ぶこともとても多く、いい刺激になった」など、楽しさの中にも保育者・教育者として大切な協調性や指導力などに気付く記述が多くみられた。「レクの全体の流れもよかったと思う。ただ遊ぶのではなく、それぞれの活動には目的や意図があった」と述べた学生には、担当者の考えていることがよく伝わっていた。ある学生は「今回は皆見知っている中なので最初から和気あいあいとした雰囲気遊びができる。しかし、キャンプ等初めて会う仲間でのレクはアイスブレイクの役割を持つので、その目的に対応した内容となる。」など今回のレクをきっかけに発展的な考えを書いている。

これらのことから、担当学生だけでなく協力したスタッフも活動した学生も、研修旅行の目的に沿った協調性や指導力、コミュニケーション能力の向上などに気づき体験を通した学びができたと言えるのではないだろうか。

(以上、坂本久美子)

4) 飯盒炊爨、自然体験

<飯盒炊爨の様子>

当初の予定ではグループ・プレゼンテーションの班(9班)で飯盒炊爨に入る予定であった。かまどの数が宿泊部屋の数と一致していたことから、急遽、宿泊の班で飯盒炊爨を行うこととなった。宿泊の班は男女別であるから、男女が別れて準備をすることとなった。通常、こうした作業は自然と男子学生が前面に出てしまい、女子学生は遠慮してしまいがちである。男女別になったことで、女子学生が積極的に参加できたようである。飯盒炊爨は学生にとっては貴重な体験だったようである。

学生たちは次のように述べている。

・飯盒炊爨は小学生の時にやったことがあったが、すっかり忘れていたのでとても勉強に

なった。火を点ける手順やコツが分かった。火を点けるのはなかなか難しいことが分かった。普段、炊飯器で炊くよりもおいしいと感じた。

- ・一人ひとり自分の出来ることを率先して行い、スムーズに活動できたと思う。過去に何度も飯盒炊爨をした経験があるので、わからない所や注意すべきところなど、配布されたプリントを見つつみんなに伝えた。
- ・テレビとかで見たのに比べ、実際にすると火がなかなかつかずかたりして、難しいなと感じることができた。みんなで一緒に作って食べるとご飯がおいしい気がした。
- ・火の調節がなかなか上手くいかず、芯が残ってしまった。生活の豊かさや便利になり過ぎた生活を考え直す良いきっかけになった。

<自然体験の様子>

食事を取った後で、蒜山高原のジャージー牛乳、生クリームを使用したアイスクリーム作りに至る。施設の方から簡単な説明を聞きながら、各自アイスクリーム作りに入った。塩を入れた缶を、中身が漏れないようにしっかりガムテープで止め、缶をゴロゴロ転がすことによってアイスクリームを作るのであるが、その転がし方も各自がそれぞれ工夫しながら楽しんで行っていた。学生たちは出来上がったアイスクリームが美味しかったという感想を述べるだけでなく、そのような活動を教育現場でも活かせるという感想を持っていた。以下は学生の感想である。

- ・簡単に作れるので小学校の旅行でも取り入れられそうだ。アイスの容器を転がすのは子どもたちもとても楽しむだろう。なぜ氷に塩を入れるのか？ どうして転がすだけで中身が凍ってしまったのか？ など学習にもつなげることが出来る。
- ・転がしていると霜がついてきたので開けてみると、思ったより凍っていなかった。原因は不明だが、氷の間にまんべんなく塩を入れていれば良かったのではないかと考えた。小学校で理科の授業をする機会があれば子どもも喜ぶのでぜひやりたい。

予定ではその後、高原ウォークラリーを開催することになっていた。しだいに雨が強くなってきたことから、予め天候が悪い場合に備えておさえていた近くの体育館で、バレーボール大会を急遽実施することになった。多くの学生たちはウォークラリーを楽しみにしていたはずであったが、誰も不満を言うことなく、どうせやるならば盛り上げていこうという雰囲気が見られた。結果的には体を動かし、楽しい時間となった。ある学生は「ウォークラリーをする予定だったが、雨の影響でバレーになった。私たちの班は一回戦で負けてしまったが、とても楽しかった」と述べている。

なお、自然体験の担当学生は次のように書いている。「急遽バレーボールをするようになった。計画を立てる段階で雨の時の場合の準備が出来ていなくて、一人焦っていた。ネットの準備やみんなを集合させ、自分の方に注目させることがなかなかできず、時間がかかった。」担当学生はこのように反省していたが、教員から見限り、他の学生も準備に協力的であり、とても良い活動となっていたように思われた。

<まとめ>

研修目的の②である「自然、文化、社会に触れ、親しむことで教育者・保育者としての見識を広める」に関して言えば、今回の学生たちの経験は、自然に親しむこと、さらに教育者・保育者としての見識を広めることに一定の効果があったと考えることができる。学生たちは自分の経験を将来に活かしていこうと思いながら積極的に研修に参加したと言えよう。

(以上、川野哲也)

5) プレゼンテーション

学生が7グループに分かれ、それぞれ手作りの出し物を夏休み前から企画し制作してきた。その成果を研修旅行の2日目の夜、学生全員の前で発表した。プレゼンテーションの内容は、3タイプに大別することができる。その内訳として、一つ目は観客に一方的に見せるもので、グループ数としては1番多い4グループであった。内容は、紙芝居、寸劇、コーラス、リコーダー合奏、手品で、一つないし二つの演目を組み合わせて行った。二つ目は観客とともに出し物を作り上げていく一体型で、2グループがこれに相当する。具体的には、観客とともにクイズを解いたり、物語をジェスチャーで表現し、それらのタイトルを当てたりした。三つ目はそれらの折衷型として、出し物を見せつつ一部観客の参加を取り入れ進行するもので、1グループが観客の参加を交えジャグリングを披露した。

あらかじめ、学生に以下の二つの目標を提示した。

- ・見る人の心を動かすようなプレゼンテーションにする。
- ・各グループ10分以内で、全員が役割や出番を持ち、一人ひとりの個性が出せるようにする。

これらの目標に向けてどのように取り組み、成果はどうであったかについて検討するために、学生に自由記述によるアンケートを書かせた。その中の多かった声や感想を取り上げ、以下「内容」「学生個々」「全体の活動」の三つの観点別に分類し考察する。また、このプレゼンテーションで学んだことが、研修旅行の目的にも結びついているかを検証したい。

<内容について>

一つの発表作品の中に、複数の演目を取り入れたり様々な表現方法を組み合わせたり、工夫が施されているグループが目立った。例えば、一つの発表の中に紙芝居と寸劇などの二つの演目を組み合わせて演じたグループもあれば、クイズを出題する際に方言を用いるというユニークなものもあった。また、ジャグリングの効果音楽をリコーダーで演奏するという異色の組み合わせもあり、とても斬新な発想であると感じた。ある学生が「初めはただ簡単な紙芝居を読むだけであったが、夏休み中に友達から指摘され、劇を加えることにした」と書いている。また、別の学生は「他のグループの内容は面白く、実習にも役立てたいと思ったものもあった。また、一つのことにとこだわらず、混合させるということで二重の楽しさがあった。工夫することで観客の心を掴むことは、幼稚園や保育園の設定保育にも似ていると感じた。保育・教育実習にも取り入れたいと思った」と感想を述べていた。どのグループも全体的に内容も多彩で変化に富み、構成も大変興味深かった。特に演目の選定や表現方法に創意工夫がなされていたのが印象的であった。作品の

完成度に関しては、2年生という段階で、表現力の知識や技術も不十分であるため、まだまだ未習熟な部分も多く、これらについては課題も多々感じる場所である。しかし、これからの表現を学習する一助になったのには違いない。

<学生の個々について>

取り組みに関して、ある学生は「一人ひとりが自分の行う手品の出来栄をよりよいものにしようとあきらめずに努力した」「自分ができることを最後まであきらめずにやってみることの大切さを学んだ」と書いている。当日、練習の過程から本番において、どの学生からも一生懸命さが感じられた。直前まで、入念な打ち合せや練習に励んでいる様子や、本番中も失敗しても決してあきらめない態度を目の当たりにし、熱意や意気込みを感じた。次に個性について、ある学生は「個性ってその人を輝かせることができるし、自分のことを伝えることができる」「個性を磨くとその人が大きく成長するのではないか」と個性の大切さや重要性を感じている。また、集団の中で個性を生かすことについての難しさと大切さを改めて考えた学生も多かったように思う。全体の構成を、個人と集団の発表のバランスを取り、個性を生かすよう工夫したグループもあった。学生には企画・構成力を身につける良いきっかけになったと思われる。また、「自信がついた」「人前での苦手意識がなくなった」「臨機応変に対応することができた」「即興性も身についた」など、個性を発揮するために努力や研究を重ねることで、本人の個々の能力向上に結びついた学生も多い。

<全体の活動について>

全体の活動に関して学生の多かった声を上げてみる。「自分たちが何か一つのことを企画し、全力で頑張って成し遂げたのを他人に賞賛されることは嬉しい」「信頼が少しずつできていくのを感じる」「最初はまとまりがなかったけれど本番が近づくにつれ、みんなで話したり考えたりとコミュニケーションが自然と増え、グループとしてのまとまりができた。みんなで協力して、何かをすることの楽しさや達成感と同じことを乗り越えてきたからこそその共感であって、一人で何かをしたときは違う喜びがあると思う」などから分かるように、みんなが協力して一つのことを行うことに対する充実感や達成感、協調性の大切さを大半の学生が感じていた。

それと同時に皆で頑張ることで、連帯感や友達の大切さも感じている。「普段ともにいることのないグループの一面を知った」「集団の中でどう行動するか、みんなのために行動することの大切さを知った」「友達のいいところが発見できた」などから読み取ることができる。学生は本番で学年が一つになるのを感じた。それは、一人ひとりの努力する思いや態度が、少しずつ集団へと移行し、本番を成功させようとする気迫に変化させたのではないだろうか。本番当日、練習の時から皆で頑張ろうとする機運が高まっていた。練習の時にできなかったことも、本番では観客である友達の励ましのおかげで成し遂げた光景も目にすることができた。進行係と発表者との良いコンビネーションも感じられた。皆の気持ちが見事に一つになる瞬間、空間を学生全員と教員が共有できた事は感慨深いものであった。

これらから、人とのつながりや自分と周りの人との存在を意識することで、仲間意識や仲間と

の絆を感じる事ができたと言える。また、相手の気持ちを大切に、自分を見つめ直すいい機会にもなり、人として成長できたと思われる。つまり友達の輪が広がり、人と出会うことによって人とかわる事の意義や重要性なども自ら感じる事ができたと言えよう。このようにかけがえのない体験ができたことは学生の将来において意味深いものであると感じた。

<まとめ>

以上、学んだことについて、学生の声や感想から読み取った結果、プレゼンテーションの目標は概ね達成されたことが分かる。また、その学んだことがそのまま研修旅行の目的に合致していると思われる。研修旅行の目的（前述の通り）を①から順に追ってみると、研修旅行①で掲げた内容に関しては、この活動を通して協調性や知らない学生とのコミュニケーション能力が十分図れたと思われる。②に関しては、「学生のお互いの発表を見合い評価し合い認め合う」「多くの人を動かし、まとめ活動することは教育者を目指す上で必要な力」など、保育・教育現場での課題ととらえている学生もいたことから、学生自身が創り出す文化にともに触れ大いに親しみ、ともに発表し学び合う中で、教育者・保育者としての見識を広めたことができたと思われる。③の学生相互の交流、親睦を深めるとともに互いに大切に、尊重する力を育むという目的は全体的に学生の感想から大いに読み取ることができた。これらのことから、このプレゼンテーションは研修目的に結びついた意義ある活動だったと思う。

(以上、本廣明美)

6) 写真コンテスト

<写真コンテストの目的>

本学は、「芸術を基盤にした教育」を一つの理念として掲げている。また、「自然、文化、社会に触れ、親しむことで教育者・保育者としての見識を深める」という研修旅行の目的に沿って、観光をいっそう充実させる一つの企画として創造性、個性を発揮できる芸術的要素を含んだ企画が何か考えられないか、いろいろと検討した結果、「写真コンテスト」を実施することにした。

<写真コンテストの実践>

昨今の学生は、高機能な携帯端末をほぼ100%持ち歩き、生活に欠かせない道具として活用している。専用のデジタルカメラに劣らない機能を持ったものも少なくない。その気さえあれば美しい写真をいつでも撮ることが可能である。また、本格的なデジタルカメラを有している学生も多い。

旅行における写真は大抵の場合、その場所に行ったという証を示す記念撮影的なものや、定番の観光写真となる場合が多い。若者にありがちな、お決まりのピースサインをした顔のアップなどが多いように見受けられるが、そのような写真は、当事者以外がそれを見て何かを感じたり、ましてや感動するような写真とはならない。「他人に見せるための写真」を撮るというのは貴重な体験になると考えた。我々はこの研修旅行の中で、あるテーマに基づいた写真を撮影し、研修

終了後、その中の1枚を必ずタイトルをつけて提出してもらうこととした。

2名の写真コンテスト担当の学生委員を中心に、学生たちに諮りテーマとタイトルを決めてもらった。そこで決まったものは、タイトル：思ひ出ぼろぼろ『夏の日2010～もうすぐ夏も終わります～』というものであった。2010年の夏は、観測史上類を見ない猛暑の夏といわれたが、9月下旬の蒜山の高原は、暦の上でも秋であるし、さすがに夏をテーマにするには難しいのではと、急遽、『秋の訪れ2010』というテーマに変更となった。しかし、実際は秋を見つける方が更に難しい作業となったようである。

学生達は、この研修の3日間、常に頭の隅にこの写真を撮るための「秋」を意識しシャッターチャンスを狙う姿勢が求められることになった。学生に事前に伝えた作品作りのポイントは以下のようなものである。

- ①山口県から別の土地に来た！ということがわかること。
- ②秋の訪れを感じさせるような季節感があること。
- ③ストーリー性があること。

※なるべく上記3つの条件が1枚に盛り込まれているような写真にする。

2人の学生はレポートに、次のように述べている。

- ・ 九月の中旬という状況の中で正直に言えば私は、まだまだ夏の盛りが強く秋なんて見つからないものだと考えていた。しかし実際に携帯電話を片手に題材を探してみれば、街路樹のわずかな紅葉は松ぼっくり、風に流される落ち葉など、普段は気付かない程の微かな秋がそこかしこに存在した。確かに見えていたはずなのに、改めて見てみなければ判らないものがある。
- ・ 思ひ出ぼろぼろで提供する写真を撮るために、上を見上げたり、下にしゃがんだり、様々な目線で物を見て、楽しく活動することができました。

この研修旅行に、「写真」という活動が加わることで、旅行の楽しみ方はいっそう膨らんだと言えよう。

研修旅行終了後1週間の期限を切って、タイトル付きの写真を一枚提出してもらい、担当の学生2名が切り絵やイラストなど、壁面構成として面白く工夫し、展示できる形にまとめてくれた(写真)。審査にあたっては、美術の授業を担当している武田に一任された。

前述したように、暦の上では秋であっても、そこはまだ夏のイメージで、紅葉や落葉など秋らしい風景や色彩はほとんどなく、分かり易く秋の季節感を表現することは難しい。目に映る客観的な視点ではなく、むしろ、情緒的な視点で如何に秋のイメージを捉え、見る者に訴えかけられるかを、審査の基準とした。

また、このようなコンテストの場合、タイトルもとても重要な役割を持つ。このタイトルの工夫ひとつで、一見なんでもないような一枚の画像がその場の空気や想いを補完してくれるのである。提出された作品を見ると、それぞれに工夫を凝らし、人と違った視点で作品を撮りたいとい

うオリジナリティーが感じられるものも少なくなかった。どうしたらテーマに沿った写真が撮れるかを考えることは、否応なく、その人の感性やものの見方を鍛えることにもなる。今回は、解像度など写真としてのクオリティーや撮影テクニック等の技術面にはとらわれず、ストレートに何かが伝わってくる数名の作品を賞に選定した。作品展示とともに次のような講評文を掲示し、最優秀賞1点、佳作5点とし、賞状を用意し表彰した。

「暦の上では秋ですが、今年の夏は異常に暑く、秋の訪れをテーマに写真を撮るのはなかなか難しかったように思います。そんな中で賞を決めるのは更に難しい作業でしたが、独断と偏見で決めさせてもらいました。旅行中シャッターチャンスを見逃さずに捉えたもの、ベタな秋の写真ではなく、秋特有のたそがれ感、寂しさ、哀愁の漂うものといったところをポイントに選んでみました。皆さんだったらどれを選びますか？」

<まとめ>

この企画は初の試みであったが、学生にも概ね好評で、普段滅多に経験しない、いわゆるアート作品にチャレンジできたことや、後でこれらを一同に展示することで、旅の思い出や、研修を振り返るきっかけにもなったようである。

将来、教育者を目指す学生にとっては、実際に行ったこと、経験したことを言葉や文章で表現する、あるいは映像や文集など作品として形に残すということも重要であろう。表現テーマの設定次第では、小学生の高学年であればこのようなコンテストを実施することも可能であるかもしれない。この度は、写真にタイトルをつけるだけのものだったが、その写真にあった俳句や川柳などを添えることを条件に加えるなどすれば、さらに面白い企画になるかもしれない。そのような楽しい企画やアイデアを学生自ら発案できる場をもっと設定し、さらに充実した企画に練り上げて継続していきたい。



(最優秀作品)



(出品作品の掲示)

(以上、武田雅行)

5. 結論

現代の教育現場の厳しい諸状況に対応できる教育者・保育者の要請にあたり、本学が行事として実施する研修旅行は、教員養成のためのカリキュラムと実習を補う資質の養成に意義あるものと位置づけて実施している。本稿は、開学以来継続して実施してきた3回目の研修旅行を、同行した教員が、事前の学生の活動状況、また旅行中の学生の様子、及び実施後のレポートをもとに検証し、その意義と課題をまとめたものである。意義については、研修の方針や目的の達成と関連づけて検討する。

まず、2年在籍の学生全員の参加が一つの成果として挙げられる。全員参加と呼びかけるものの単位認定とは関係無く、免許・資格とも関連せず、また授業料とは別の経費も必要な行事であり、数多い学生の中には不参加者がでてくることが予測された。しかし、大学の授業で欠席・遅刻がある学生も、この研修旅行には積極的な参加が見られた。

研修旅行の事前準備は7月から始まった。グループ・プレゼンテーションは、まだ充分意思疎通ができていない状況の中で、10名前後でつくりあげる表現を企画し、練習を重ねた。グループによる製作活動ともいえるこのプログラムは、学生個々に役割を認識させ、グループの一員としての自覚を強く促したのではないかと考える。このことは、全員参加に大きな影響があったと推測できる。

研修旅行中もさまざまな場面で協調性が発揮された。例えば、長時間の移動を楽しい空間と努力する担当学生と、それを気遣い支援しようとする学生の姿である。また全体レクリエーションの進行を順調に進めるための事前打ち合わせや、担当学生の技量不足をフォローしようとする姿などに、学生達の自主的かつ深いコミュニケーションと、そこから生じる協調性、また信頼関係が育まれる様子を見て取ることができた。一つのことを成し遂げるために立場を認識し、フォローされる側、する側が互いを理解し合い、言動に移して臨機応変に協力できることは、教育者・保育者の資質に最も必要な社会性の育成につながる体験である。

互いの立場を認めながら、自分の置かれた立場で目標を達成するよう努力できることは、互いを大切に、そして尊重することでもある。フリースピーチでは、教員の予想を超えた前向きな取り組みが見られた。1学部1学科の小規模大学とはいえ、日常会話をしたことのない集団の中で、心を開いた内容の話は難しいのではないかという懸念があった。しかし、学生たちは自己の表現が他者に受け止められ、他者に影響を与えることを身近に感じるとともに、フリースピーチという交流により、信頼関係を作りあげると同時に、互いを大切に、尊重するといった具体的な交流の在り方まで体得している。

そして、プレゼンテーションにおいても、多様な演目の選定や表現方法の中で、グループを構成する学生個々の個性を生かす基本となる、互いに存在を認め、また尊重することを学び、一つのことを目標として達成するための努力や協力による共感を通して、達成感や楽しさを得ることができる過程を実践的に学んでいる。加えて、友だちの輪の広がりを感じとりながら、人との出会いや、人と関わることの意義や重要性について気づいており、この体験が教育者・保育者として、さらに豊かな人間性を育むものとなるであろうと考える。

今回の研修旅行は、出雲、松江、蒜山、倉敷という、文化と自然に恵まれた地への旅行であったが、時間と天候の面から、十分にそれらを堪能することが難しかった。しかし、蒜山の大自然の中での飯盒炊爨や、自然体験では地産の牛乳でアイスクリームを作るというグループでの体験を通して、この楽しい活動を将来教育の場で実践したいと感じている。また、『秋の訪れ 2010』をテーマにした写真コンテストを通して、木の葉の色づきに目を向け、地面に這い蹲ってカメラにレンズを向けるなど、日常見過ごしてしまう身近な自然や生活、人々に意識を向けていた。乳幼児期から児童期の子どもは、自然環境に大きな影響を受けて成長する。学生達は、おそらく意識を向けることが少ない自然や生活、そこに生きる人たちに目を向けることは、教育・保育に関わろうとする学生達には有意義であったと思われる。

以上のことから、全学生の参加、学生の主体的な企画・運営、グループワークの重視という三つの方針による研修旅行は、表現やコミュニケーションの実践を通しての理解と能力の向上、互いの立場を理解・尊重しながら協力し、感情の共有を通して信頼関係を育むなどの体験により、教育者・保育者としての高い資質の形成、見識を拡張、相互理解と尊重する力を育むという研修旅行の目的を達成できたと考える。ただし、いくつかの課題もある。その一つに、企画・運営について、研修旅行を単位化していないことから準備の時間の確保が難しいことがあげられる。研修旅行の充実を図るためには、準備段階の目的意識づけ、一つひとつの活動内容の目的を把握した上での学生の企画・運営、表現の練習に必要な時間・空間の確保、カリキュラム化への検討が上げられる。さらに、旅行先や日程等の企画段階への学生の参加の度合い、経費等の検証等も課題として残る。

研修旅行の目的達成は、教育者・保育者としての高い資質の形成、見識の獲得、人間を尊重する精神を育むことであり、その達成は本研究の目的と合致する。研修旅行という教員養成課程の一つの行事が、在学する4年間における教師主導の講義・演習、および教育実習では得られない数少ない貴重な機会であり、学生の教育者・保育者としての資質の形成との関連を確認することができた。将来、教育者・保育者を目指す学生の使命感、そして意欲や熱意の向上につながり、また教育現場への入職後の様々な課題に対して、他者の多様な価値観や状況を理解でき、そして試行錯誤しながら問題解決の方策を考え、対処できる適応力の養成につながるものとなるよう、今後もさらに検討を加えながら研修旅行を継続する。

(以上、河北邦子)

-
- 1) 荒川徳子『教師教育改革のゆくえ ―現状・課題・提言―』第8章 現場で求められる教師の資質能力 創風社 (2006)
 - 2) 山崎準二「教師のライフコース研究から見た教職意識の変化 ―実践と振り返りで培える教師としての心構え―」『教師のライフコース研究』創風社 (2007)
 - 3) 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」(2006)